

没後30年

白石隆一

～あこがれの欧州～



2016 1/30 SAT ▶ 4/3 SUN

1/30は入館無料

画伯、
還暦の冒険!



出陣時の白石夫妻 隆一の実弟 白石隆平画

一関市博物館

岩手県一関市蔵美町字沖野袋215-1
Tel.0191-29-3180 Fax.0191-33-4006
<http://www.museum.city.ichinoseki.iwate.jp>

主催 一関市博物館
開館時間 9:00～17:00 ※入館は16:30まで
休館日 毎週月曜日
(月曜日が祝日の場合はその翌日)
入館料 一般 300(240)円
高校生・大学生 200(160)円
中学生以下無料

※()内は20名様以上の団体割引料金
※一関市内65歳以上の方、及び身障者手帳等をお持ちの方は入館料が免除されます

■ギャラリートーク
2月6日(土)・7日(日)
3月5日(土)・6日(日)
いずれも午前11時～11時40分
午後2時～2時40分

没後30年

白石隆一

～あこがれの欧州～

ごあいさつ

昭和の一関を代表する洋画家の一人、白石隆一(1904～1985)。

千厩の名家に生まれた白石は、旧制一関中学校4年生の時、画家への志を抱いて卒業を待たずに上京し、川端画学校で学びました。また、東京美術学校(現 東京藝術大学)の研究生、清水良雄門下として研鑽を積み、光風会や帝展、新文展などに出品するなど精力的に活動しました。

東京で制作を続けていた白石が帰郷したのは、39歳の時でした。太平洋戦争終戦の前年、昭和19年(1944)の東京大空襲によって、自宅も、描きためた作品も全て焼けてしまったのが契機でした。そして、昭和60年に80歳の生涯を閉じるまで郷里を離れることなく制作を続け、日展や光風会などへ出品をするほか、「一関美術研究所」を設立して地域の美術振興や後進の指導に力を尽くしました。写実を追究した白石作品の中でも、砂鉄川の鮎や三陸で捕れた鱈といった「魚」は、彼の代名詞となりました。

地域に愛される画家として活躍しながらも、白石は再び東京で暮らし、描きたいと願っていました。さらに優れた作品を生み出すには、より多くの芸術的刺激が必要だという考えからです。しかし、その望みが叶えられることはありませんでした。

そんな彼が、芸術の中心地である、あこがれのヨーロッパへと旅立ったのは昭和40年(1965)4月、60歳の時。郷里の人びとや同級生らの支援を受け、初枝夫人を伴って、およそ5か月にわたり12か国を旅しました。

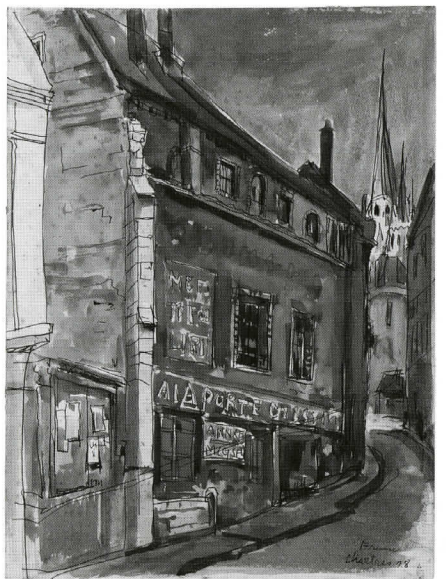
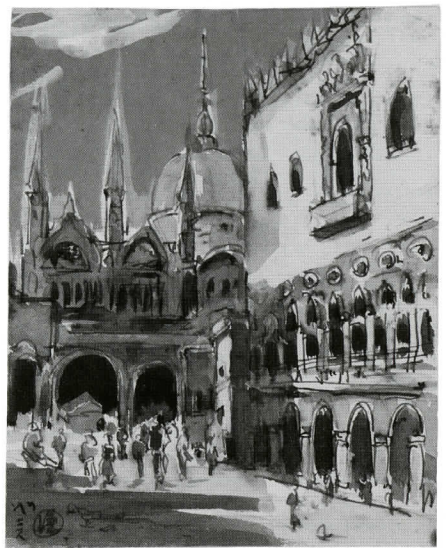
本展でご覧いただくのは、この欧州取材旅行の際のスケッチ約360点です。これらは、長い間ご遺族が大切に保管されてきたものですが、このたび初公開の運びとなりました。水彩絵の具で色づけされた大小の紙片には、各都市ならではの風物や、特色ある景観が美しく描かれており、臨場感に満ちています。白石の足取りに倣ってスケッチをたどると、彼が目を見張った、ほぼ50年前のヨーロッパへといざなわれるかのようです。また、スケッチと合わせて、初枝夫人による日記も紹介します。

さらに、欧州旅行の成果の一端として《パリの街角》を展覧するとともに、「魚の画家」として親しまれながらも、「どのようなモチーフも描き上げてみせる」という自負心を抱いていた一例として、白石人物画の代表作である《ひげのおじさん》(いずれも岩手県立美術館所蔵、油彩画)を特別出品します。

本展の開催にあたり、貴重な作品をご出品賜りました白石良基氏及び岩手県立美術館に、また、ご理解ご協力下さいました関係各位に心よりお礼申し上げます。

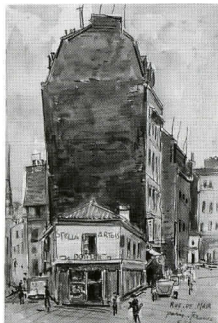
平成28年1月30日

一関市博物館



白石隆一

- 明治37年(1904) 9月、岩手県東磐井郡千厩町(現一関市千厩町)の白石家、屋号「構井屋」の長男として生まれる。
- 大正12年(1923) 画家への志を抱き、両親の許しを得て、旧制一関中学校を4年で中退する。上京し、川端画学校に入学する。
- 昭和3年(1928) 帝展及び、光風会に初入選する。
- 5年(1930) 1年間、東京美術学校(現 東京藝術大学)の研究生として過ごす。
- 6年(1931) 洋画家 清水良雄に師事する。
- 11年(1936) 文展入選。以降も帝展・文展の流れを汲む紀元二千六百年奉祝展、新文展、日展で入選を重ねる。
- 12年(1937) 小林初枝と結婚。
- 13年(1938) 光風会K夫人賞。翌年は同会三星賞。
- 15年(1940) 光風会会友となる。17年(1942)には光風会会員となる。
- 19年(1944) 戦争記録画の制作を命じられ、《騎兵隊と戦車隊の協同作戦》を描く。
- 20年(1945) 東京大空襲で自宅も作品も焼失し、千厩で暮らし始める。
- 21年(1946) 《雄》が第1回日展に入選。同年第2回日展入選の《魚》で岡田賞。
- 28年(1953) 日展に出品依嘱を受ける(昭和28～昭和31年、昭和34年の計5回)。
- 29年(1954) 仲間とともに「一関美術研究所」を設立。10年間と期限を定めて一関で暮らす。精力的な制作に加え、後進の指導や美術の啓蒙に尽くした。
- 33年(1958) 河北美術展の委員に推薦される(昭和40年には顧問に推薦)。
- 40年(1965) 4月からおよそ5か月におよぶ欧州旅行。帰国後は千厩での生活に戻る。
- 60年(1985) 菩提寺である大光寺(千厩)に、《阿弥陀三尊像》を寄進する。
7月、80歳で没。



右上から
《ベニス》スケッチ 1965年
《フランス シャトルル》スケッチ 1965年

左から
《トロンハイム》スケッチ 1965年
《フランス パリ》スケッチ 1965年

一関市博物館

ICHINOSEKI CITY MUSEUM

〒021-0101 岩手県一関市蔵美町字沖野々215-1
Tel.0191-29-3180 Fax.0191-33-4006

一関市博物館

検索

■各交通手段と所要時間

JR東北新幹線

| | | | |
|---------|---------|----------|------------------|
| 東京 ⇄ 一関 | 約1時間58分 | 一関市博物館まで | 一関駅から車で約17分(9km) |
| 盛岡 ⇄ 一関 | 約23分 | | ※一関駅からバスの運行あり |
| 仙台 ⇄ 一関 | 約21分 | | (蔵美溪バス停下車、徒歩約5分) |

東北自動車道

| | | | |
|---------------|----------------|----------|------------------|
| 浦和IC ⇄ 一関IC | 約4時間15分(416km) | 一関市博物館まで | 一関ICから車で約7分(5km) |
| 仙台宮城IC ⇄ 一関IC | 約55分(88km) | | |
| 盛岡IC ⇄ 一関IC | 約1時間(92km) | | |

(表示した所要時間は、ご利用される時間や天候等により異なります)

